

天麻末の併用で新たに認識できた 半夏白朮天麻湯の向精神作用と 認知機能改善の可能性

つちうら東口クリニック 院長(茨城県) 川嶋 浩一郎

半夏白朮天麻湯は、広くめまいの治療に用いられている。構成生薬の一つである天麻はめまい、頭痛、けいれん発作を鎮める作用があることから、点滴や入院を必要とする強いめまいを繰り返す場合は、半夏白朮天麻湯に天麻末を加えることで体質改善をみる症例を経験している。本稿では、天麻末を併用することで半夏白朮天麻湯の向精神作用と認知機能改善の可能性について、症例および古典・既報から考察した。

Keywords 半夏白朮天麻湯、天麻、向精神作用、認知機能改善

はじめに

漢方診療では、患者の体格や体質、病状に応じて適宜、生薬構成や量を調整する随証療法が基本ですが、漢方生薬の保存管理や服用の利便性を考えると、エキス製剤中心にせざるを得ない状況があります。当院でもエキス製剤中心の漢方診療を行っているため、生薬構成の異なる2社の半夏白朮天麻湯エキス製剤を使い分けたり、構成成分の一部である人參や天麻の生薬末を加えたりして、画一的なエキス製剤のデメリットをカバーしています。

半夏白朮天麻湯は、めまいに使われることが多い処方、小児から高齢者まで広く用いられ、胃腸虚弱と冷えとめまいと頭痛の保険適応があります。原典の脾胃論の記述をみると、もともと脾胃(胃腸)の虚弱体質があるところに、急な寒気に会ってめまいや頭痛を起こした者や、季節の変わり目や寒気でめまいや頭痛を起こしやすい者の体質改善に用いる処方であることがわかります。

めまいの代表処方足瀉湯(足瀉5; 白朮2)で速効性がありますが、医療用エキス製剤がありません。この二味を含む医療用エキス製剤には、五苓散、当帰芍薬散、啓脾湯、半夏白朮天麻湯があります。いずれもめまいに有効ですが、処方名から判ることは、五苓散は水毒、当帰芍薬散は血虚、啓脾湯は脾虚を主としためまいであろうと推測できます。

半夏白朮天麻湯の半夏は、痰飲の病の聖薬といわれる二陳湯(半夏・茯苓各5; 陳皮4; 生姜2; 甘草1)の君薬です(図1)。半夏白朮天麻湯には二陳湯の甘草を除く全ての生

薬が含まれているため、痰飲の治療を強く意識した処方であると判ります。白朮は脾胃の利水を主り人參と合わせることで強力な補脾作用を発揮しますが、この処方にはさらに生姜、神麴、麦芽を加えて胃の消化を助ける工夫がされているので、補脾も重視した処方であることがわかります。処方名の3番目にある天麻は、エキス製剤としてはこの処方だけに使われている平肝熄風の生薬で、めまい、頭痛、けいれん発作を鎮める作用があるとされています¹⁾。

したがって、当院では、めまいを訴える症例には上記4処方を中心に使い分けていますが、特に強いめまいで、点滴や入院を必要とするような状況が過去にあった場合、半夏白朮天麻湯に天麻1.5g(1~3g)程度を加えるようにしています。

図1 半夏白朮天麻湯の構成生薬

			二陳湯(○印)
(1)	甘草 ○	調和、健胃	
(5)	半夏 ○(3)	制吐作用 痰を除き気のめぐりを良くする	
(2)	生姜 ○(0.65)		
(4)	陳皮 ○(3)		
	人參 (1.5)	消化吸収機能を 整える	
	黄耆 (1.5)		
(5)	茯苓 ○(3)		
	白朮 (3)	停滯した水分を 除く	
	蒼朮 (3)*		
	神麴 (2)*		
	足瀉 (1.5)		
	麦芽 (2)	消化補助	
	黄柏 (1)	整腸	
	天麻 (2)	ふらつき、めまいの改善	

*: エキス製剤によっては含まれない場合がある

天麻末の併用で頭がスッキリして冴えるようになり、併用を中止したらボーッとするようになったので、天麻末をしばらく中止しないで欲しいと訴える症例を経験しました。天麻にはめまいや頭痛以外の薬効がありますが、それを意識することで、半夏白朮天麻湯の運用の幅が広がるのではないかと思います、症例を提示して報告いたします。

症 例

症例1 63歳女性 身長161cm 体重60.3kg

【家族歴】 姉が65歳で糖尿病と心臓病で死亡している。

【現病歴】 9年前から高血圧と高脂血症で当院へ通院している。X年8月3日の受診時に、1ヵ月前に膀胱炎になって近医を受診すると抗生剤を処方され、1回服用したらひどいめまいと嘔吐があり、点滴で症状は軽減した。めまいが続くため耳鼻科で精査したところ、右耳の良性発作性頭位めまい症と診断され、内服薬を処方されたが、どうもスッキリしない。耳鼻科の薬(ベタヒスチンメシル酸塩)を3回指示通りに服用すると調子が悪いと訴えた。それまでの六君子湯を中止して、半夏白朮天麻湯(EK-37)7.5gに天麻末1.5gを加え分3で処方した。1ヵ月後の受診時に、めまいがまったく出なくなり、頭がスッキリするようになったと述べた。この漢方処方方を継続して9ヵ月目、翌年の5月に、天麻末を服用し始めてから、頭がスッキリして、不整脈がまったく出なくなったと述べた。毎年のように5～6月に出ていためまいが、まったく気配もなかったそうである(図2)。

症例2 61歳女性 身長158cm 体重55.0kg

症例1の妹。14年前から2型糖尿病、高脂血症で当院へ通院している。姉(症例1の患者)に勧められて、X年9月に姉と同じ漢方と天麻末を希望した。姉が服用後、頭がスッキリと冴えて気分が良かったので、自分も試してみたいとのこと。HbA1c 6.3%で安定しており胃腸虚弱と水毒とめまいの既往があったため、希望を受け入れて、同じ処方EK-37を7.5gに天麻末1.5gを加えて処方した。9ヵ月目に天麻末1g分2に減量したら、効果を実感しているので1.5g分3に戻して欲しいと求められた(図3)。

考 察

改めて天麻と半夏白朮天麻湯について、先人の口訣と現代の薬理研究についてまとめてみました。

天麻は、最古の本草書である神農本草経で、草部上品に掲載された赤箭^{せきせん}のことで、「赤箭 一名離母、一名鬼督郵。味辛温。生川穀。主殺鬼精物、蠱毒惡氣。久服益氣力、長陰、肥健、輕身増年。」とあり²⁾、「人を傷害する惡鬼の働きを殺消する作用があり、長く服用すると氣力体力が益し、陰の氣、生殖の力をつけ、体を肥らせ健康にし、身も軽やかになり、年齢を増すことができる」と記され、赤箭は地上部の名称とされています³⁾。

図2 症例1 経過図

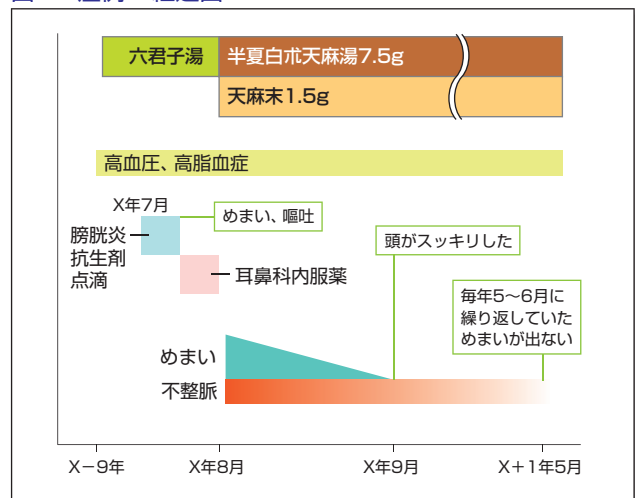
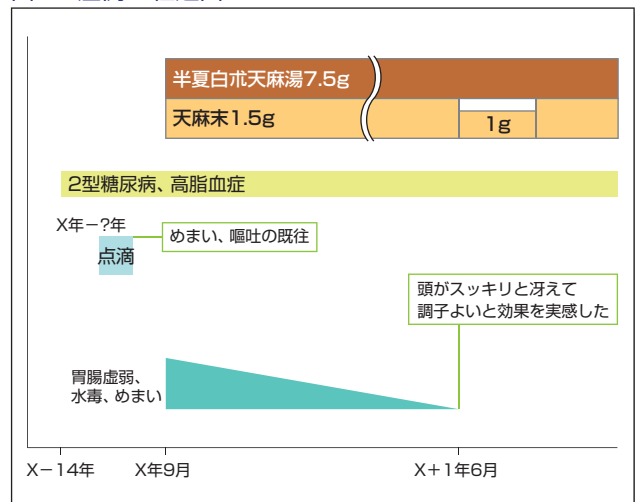


図3 症例2 経過図



李時珍(1518~1593)の本草綱目によれば、「天麻は肝経の気分の薬である。[素問]には、諸風の震えとめまいは、いずれも木に属すとある。眼黒頭旋は、風虚が内に起こったものであり、天麻でなければ治すことができない。天麻は定風草ともいうくらいで、風を治す神薬である。天麻を用いた薬を久しく服用すると、全身に紅丹を発することがあるが、これは風が去ったしるしである。」と強いめまいを治す神薬であると高く評価しています⁴⁾。陳士鐸(17世紀)の本草新編では「天麻は、よく昏眩を止め、風を療し湿を去り、筋骨の拘攣・麻痺を治し、血脈を通し、竅を開くが、それ以外は信じるに足りない。しかるに外邪が甚だ盛んで、経絡・血脈に閉じ塞がった場合、天麻を用いずどうして経を引き、気血を収め補う薬を、病を受けたところへ直かに入れられようか。」と評価しています⁴⁾。

香月牛山(1656~1740)は、牛山活套(1779年刊行)の中で「女性、とくに未婚の女性の頭痛のうち、およそ気鬱が原因で気分不快になる者には半夏白朮天麻湯を用いよ。とてもよく効く」、「痰厥(水毒で四肢厥冷)して気悩みし、えもいえず心持ちが悪いという者がある。半夏白朮天麻湯を用いるとよい」と述べ、原典にある「痰厥の頭痛」という証に、新たに抑うつ傾向や神経症傾向という証を加えています⁵⁾。

天麻の薬理作用については、抗痙攣作用、平滑筋収縮阻害作用が報告されています。向精神作用としては、記憶保持能の改善があり、脳血流を改善し、認知症モデル動物で β アミロイドによる神経細胞死を抑制した報告などがあります³⁾。

臨床的にも、不眠症40例に天麻末2g就寝前服用で、80%に有効で、寝つきを良くし、中途覚醒時の再睡眠を改善しました。認知症の20例に天麻末2g就寝前服用させ、17例で軽度改善しました。5歳小児のパニックに、抑肝散に天麻と芍薬を追加して改善した報告もあります³⁾。

天麻及び半夏白朮天麻湯には、平肝熄風してめまい、頭痛、麻痺、痙攣を改善する作用は従来通りですが、香月牛山が指摘しているように、気鬱して意欲が低下して、気分が優れない者に特に有効で、服用すれば日中は頭が冴えて、夜はぐっすり眠れるようになり、記憶力を改善し、天麻や人参、黄耆によって、長期に服用すれば気力体力が増して健康になり寿命も延びる処方であり、特に精神的にデリケートな思春期の起立性調節障害や、気鬱を伴う認知症などに積極的に用いてみて良い処方であろうと思われました。

【参考文献】

- 1) 佐竹元吉, 伊田喜光, 根本幸夫(監修): 漢方210処方生薬解説(昭和漢方生薬ハーブ研究会編), 122, じほう, 2001
- 2) 森立之 神農本草経: 早稲田大学古典籍総合データベース (http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ni01/ni01_00799/ni01_00799_0001/ni01_00799_0001.pdf)
- 3) 鳥居塚和生 漢方基礎講座 生薬の薬効・薬理シリーズ76 テンマ 漢方研究 (391), 274-277, 2004-07
- 4) テンマ 中薬大辞典 第3巻, 1870-1873, 小学館, 1985
- 5) 稲木一元 臨床医のための漢方薬概論, 596-602, 南山堂, 2014